

大韓民国における中学校教育課程の変遷および 「学校スポーツクラブ活動」の役割に関する研究

スポーツ文化研究領域
5013A008-7 李 賢承

研究指導教員：友添 秀則 教授

【問題の所在】

韓国では、2012 年 2 月に行政安全部によって「学校暴力の根絶総合対策」が発表された。そこでは、韓国の児童・生徒を取り巻く現状として、社会的な相互作用の能力低下や、学業ストレスを解消するための身体活動の参加機会が減少傾向にあることなどが指摘された（行政安全部、2012, p. 4）。

こうした問題に対処するための方策として、同年 9 月から中学校において「学校スポーツクラブ活動」が行われるようになった。「学校スポーツクラブ活動」は正課の活動として位置づけられ、週 1, 2 回程度の頻度で、生徒が自ら選択したスポーツに取り組む時間とされている（教育科学技術部、2012）。

一方で、「学校スポーツクラブ活動」が導入される以前から、「教科体育」や、特別活動の一環として「スポーツ活動」が実施されてきた。したがって、韓国の中学校の教育課程では、体育・スポーツ活動に関する時間が複数設けられており、類似した活動が混在している。そのため、例えば、2013 年からは、「学校スポーツクラブ活動」の時間を「教科体育」に代替することを可能とするなど、教育課程の見直しが進められている。

しかしながら、こうした教育課程の見直しが始まった背景には、「学校スポーツクラブ活動」、「スポーツ活動」、「教科体育」とい

った、三者それぞれの役割の曖昧さを指摘することができる。はたしてこれらの活動は、どのような役割を有しているのだろうか。とりわけ、最も新しい制度である「学校スポーツクラブ活動」は、近年の児童・生徒を取り巻く社会状況を反映して設けられた制度であるにも関わらず、その独自性は明らかにされていない。

【本研究の目的】

本研究では、韓国における中学校の「学校スポーツクラブ活動」の成立過程の検討を通して、「学校スポーツクラブ活動」の役割を明らかにするとともに、課題を明示し、今後の在り方を提言することを目的とする。

【各章の概要】

〈第 1 章〉

「学校スポーツクラブ活動」の源流の一つとして、第 1 次教育課程から第 3 次教育課程において特別活動に位置づけられていた「体育のための活動」が挙げられる。「体育のための活動」の教育目標は、生徒らが自治的に活動を行うことによって、心身鍛錬に励み、技能を向上させる点にあった。こうした「体育のための活動」は、第 3 次教育課程全体の教育目標であった、「体力や健全な精神の涵養」を果たすために、重要な位置にあった。

しかし、このような目的は、教師や児童・生徒には、あまり認識されていなかった。そのため、「体育のための活動」は、実際には形式的な時間として扱われてしまっていた。

〈第2章〉

第4次教育課程から第6次教育課程では、児童・生徒に基礎的な知識を幅広く身に付けさせることが重視された。そのため、いわゆる知識偏重型の教育が多く施された。一方で、「体育活動」に対しては、児童・生徒の関心は低く、クラブ活動の一環としての「体育活動」は、軽視される傾向にあった。

〈第3章〉

第7次教育課程からは、教育課程の性格が生徒中心に変わり、急変する社会的な要請、学校現場の問題、生徒に関する諸問題を解決するための政策が施行されることになった。それにより、数多くの教育課程の改訂が行われた。

その中でも、2009改訂教育課程の背景としては、生徒中心という考えをもとに、創意性、人性の涵養という教育課程の目標が示されていたが、「スポーツ活動」の教育目標には、人性涵養という教育目標は十分には示されていなかった。

〈第4章〉

「学校スポーツクラブ活動」の役割として、先行研究によって指摘された「創意・人性」、「身体的・情緒的」は、鄭の「6つの力」の概念を分析方法（視点）として考えると、「創意・人性」（知力）、「身体的・情緒的」（体力・情意力）が付け加えられ、「社会貢献力」が求められていることが明らかになった。そのため、「学校スポーツクラブ活動」では、生徒の趣味・興味・素質を活かせる身体活動、余暇善用、スポーツに参加できる機

会を保障していくべきと言える。

そして、「学校スポーツクラブ活動」を推進する一方、2014年からは、「学校スポーツクラブ活動」の時間を「教科体育」に代替することが可能となった。これを鄭の「6つの力」の概念を分類方法（視点）として考えると、現在、「学校スポーツクラブ活動」と「教科体育」では、知力、道徳力、体力、情意力、社会貢献力の涵養が求められていると考える。

〈結章〉

結章では、本研究の総括を行い、今後の課題を明示した。

「学校スポーツクラブ活動」を充実した取り組みにするために、今後も学校では、生徒の趣味・興味・素質に基づいて身体活動、余暇善用、スポーツに参加できる機会を保障すべきであると考え、今後の課題としては、本研究を初発の試みとして、より具体的な「学校スポーツクラブ活動」の活動実態などを明らかにしていく必要がある。

〈引用・参考文献〉

鄭（1992）韓国における教育課程政策の歴史的展開（1945 - 1990）. 筑波大学院博士論文.

行政安全部（2012）学校暴力の総合対策.
<http://dl.nanet.go.kr//SearchDetailList.do>（参照日 2016年2月16日）

教育科学技術部（2012）初・中等学校教育課程総論. 14 : 11-12.

教育課程評価院. <http://ncic.re.kr/mobile.kri.org4.inventoryList.do>,（参照日 2016年2月16日）